

第5学年道徳科学習指導案

日 時 令和〇年〇月〇日 (〇)
授業者 〇 〇 〇 〇

1 主題名

かけがいのない生命「D-(19) 生命の尊さ」

2 ねらいと教材

(1) ねらい

自他の生命を尊重し、かけがえのない命を大切にしようとする心情を育てる。

(2) 教材名

「コースチャぼうやを救え」(東京書籍 新しい道徳5年)

3 主題設定の理由

(1) ねらいや指導内容についての教師の捉え方

本主題は、学習指導要領解説特別の教科道徳編小学校第5学年及び第6学年の「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の指導事項「(19)生命の尊重 生命が多く生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること」を受けている。

ここでいう生命とは、連続性や有限性を有する生物的・身体的生命、さらには人間の力を超えた畏敬されるべき生命として捉えている。主として人間の生命の尊さについて考えを深めることが中心となるが、生きているもの全ての生命の尊さも大切に考えなければならない。この時期の発達段階においては、個々の生命が互いを尊重し、つながりの中にあるすばらしさを考え、生命のかけがえのなさについて理解を深めるとともに、生死や生き方に関わる生命の尊厳など、生命に対する畏敬の念を育てることが大切である。

(2) 児童のこれまでの学習状況や実態と教師の願い

児童は、これまでの学習を通して、生命は唯一無二であることや自分一人のものではなく、多くの人々の支えによって守り、育まれている尊いものであるということを考えてきた。また、病気や怪我をしたときの様子から、一つしかない生命の尊さを知り、今ある命は、先祖代々受け継がれてきているということを理解している。自分や自分の身近な人の命は大切だと理解しているが、全ての生命を尊重しているかといったら、そうではない。そこで、家族や仲間とのつながりの中で共に生きることすばらしさや、生命救い守り抜こうとする人間の姿の尊さなど、様々な面から生命のかけがえのなさを自覚し、自他の生命を尊重し、かけがえのない生命を大切にしようとする道徳的心情を育てることが必要であると考えた。

(3) 使用する教材の特質やそれを生かす具体的な活用方法

本教材は、1990年に旧ソビエト連邦で大やけどを負った3歳のコースチャ坊やを札幌医大病院の医師団が全力を挙げて治療を行う話である。サハリン州知事から北海道知事に連絡が届いたときには、あと数十時間の命と言われ、パスポートなし、ビザなしで入国を認め、救助要請があつてから13時間後には、医師団がサハリンへ向けて飛び立った。医師団の必死の治療とそれを知った日本全国の人から励ましの手紙や見舞金相次いで寄せられた。そして、コースチャ坊やは、元気になりソビエト連邦に戻っていった。

本時の指導に当たっては、授業当日の朝、児童に事前に読ませておき、内容を理解させすぐに話し合いに入ることができるようにする。授業では、1990年当時の日本と旧ソビエト連邦の関係やサハリンからの距離に触れ、国境を越えて一人の少年を救った周りの人達の思いはどのような思いだったのか、また、どのような行動をしたのかを考え、生命の尊重について深く考えさせたい。

4 学習指導過程

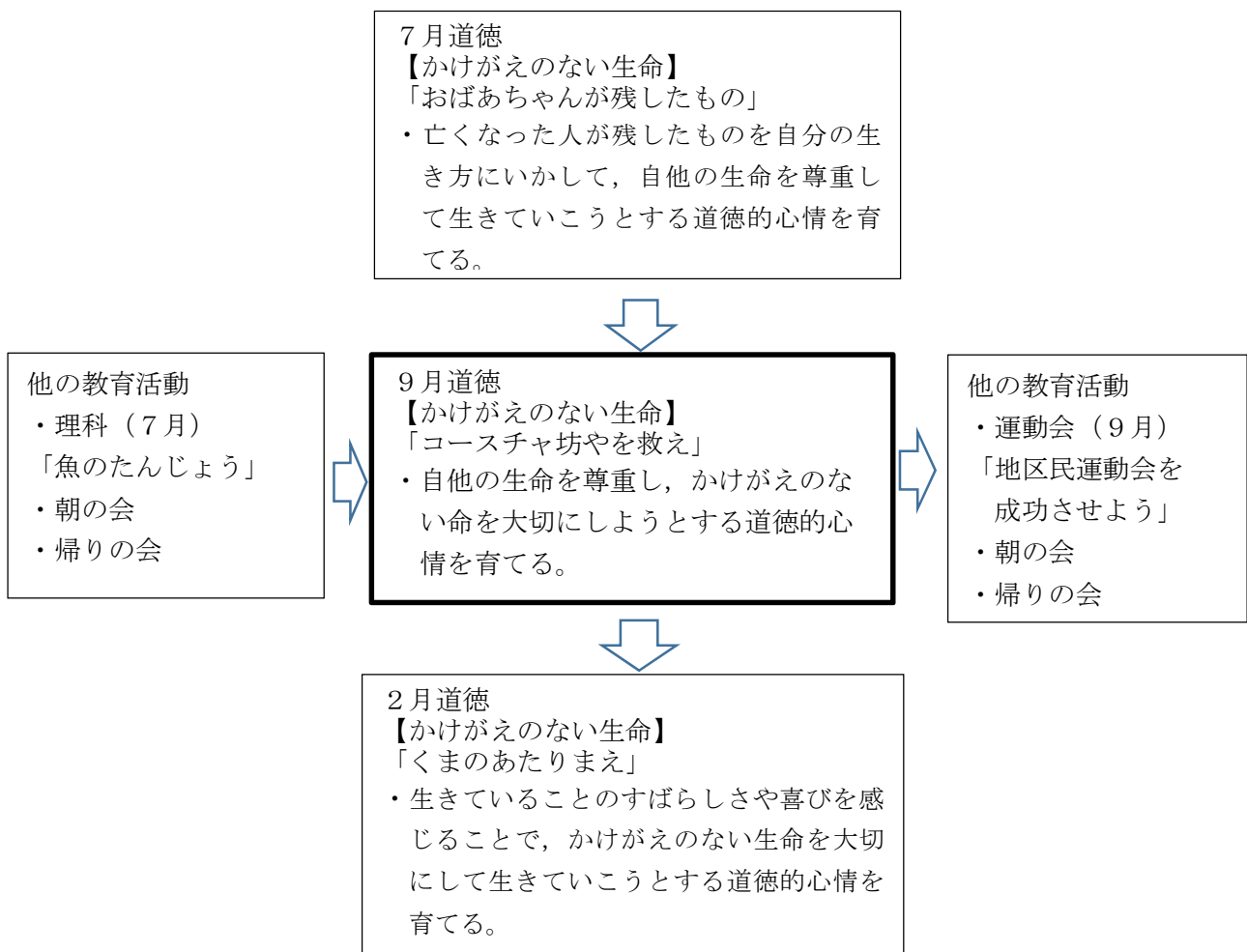
	学習活動 ○主な発問 ・予想される児童生徒の反応	指導上の留意点
導入 7分	<p>1 ICTを活用し、教材の内容に興味・関心をもたせる。</p> <p>○ みなさん、サハリンという場所を知っていますか。</p> <p>・分からない。どこだろう。</p> <p>○ やけどや大けがをしたことがありますか。</p> <p>2 課題をつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>人の命を守ることの大切さについて考えよう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> 教材の内容を把握するために、プレゼンテーション資料を活用する。 プレゼンテーション資料を通して、サハリン、モスクワ、札幌の場所を確かめ、なぜ札幌で治療しなければならなかったのかを考えさせる。 今までの生活を振り返らせ、本時の課題をつかむために、やけどや大けがをしたときの自分自身の痛みや、家族が心配していたことなどを想起させる。
展開 前段 20分	<p>3 教材の内容を把握し、状況を捉える。</p> <p>○ コースチャ坊やの大やけどを知った人達は、どのようなことをしましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サハリン州知事から北海道知事に連絡 ・外務省や北海道庁がパスポート、ビザなし入国の手配 ・札幌医科大学の医師が治療 ・励ましの手紙や見舞金が届く ・両親が必死に看病する。 <p>○ コースチャ坊やの命が救われたのはなぜでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なんとかして、助けたいと思った人がたくさんいた。 ・応援の手紙がコースチャ坊やを勇気付けた。 ・家族だけでなく、周りの人達の助けたいという思いが強かったから。 ・みんながあきらめないで助けようと思ったから。 	<ul style="list-style-type: none"> すぐに話合いに入ることができるように、朝の読書の時間に事前読みをさせておく。 教材の内容を把握し、状況を捉え、当時の日本とソビエト連邦との国境の状況、行われた治療がどれだけ大変だったかということを実感させるために、プレゼンテーション資料を活用する。 あと数十時間と言われた命が助かった理由を考えることを通して、当時の人々の坊やを助けたいという気持ちと、助けるためにはどうすればよいのか考えて行動に移したことに気付かせる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>問い返しの発問</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コースチャ坊やを救うには、簡単ではなかったですね。 </div>
展開 後段 10分	<p>4 自他の生命を尊重するために必要なことは何か考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>◎ みんなを動かしたものは、何でしょう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・なんとしても助けようという、家族だけでなく、家族以外の人達の思い。 ・国は違っても、救おうとする行動。 ・一人一人の優しさ。 	<ul style="list-style-type: none"> 考えを整理させるために、ノートに自分の考えを記入させる。 たくさんの人を動かした根底にある思いを多面的・多角的考えさせるために、グループで話合った後に、全体で発表し考えを共有する。

終 末 8 分	<p>5 自己の生き方について考える。</p> <p>○ 現在のコースチャ坊やの資料があります。資料を聞いてどのように思いましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命が助かって良かったな。きっと、みんなに感謝して生きていると思う。 ○ 人の命を大切にするために、大事だと思うことはどのようなことでしょうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書には、現在の様子は紹介されていないが、資料から現在の様子を伝え、当時のコースチャ坊やに関わった人達のたくさんの行動や思いの結果、今のコースチャがあることに気付かせる。 ・道徳的価値を自分との関わりで捉えさせるために、振り返りの視点を示す。
------------------	---	--

【評価】

自他の生命を守ることの大切さについて考え話し合うことを通して、生命を救い守り抜こうとする人間の尊さに気づき、自他の生命を大切にしようと考えようとしていたか。

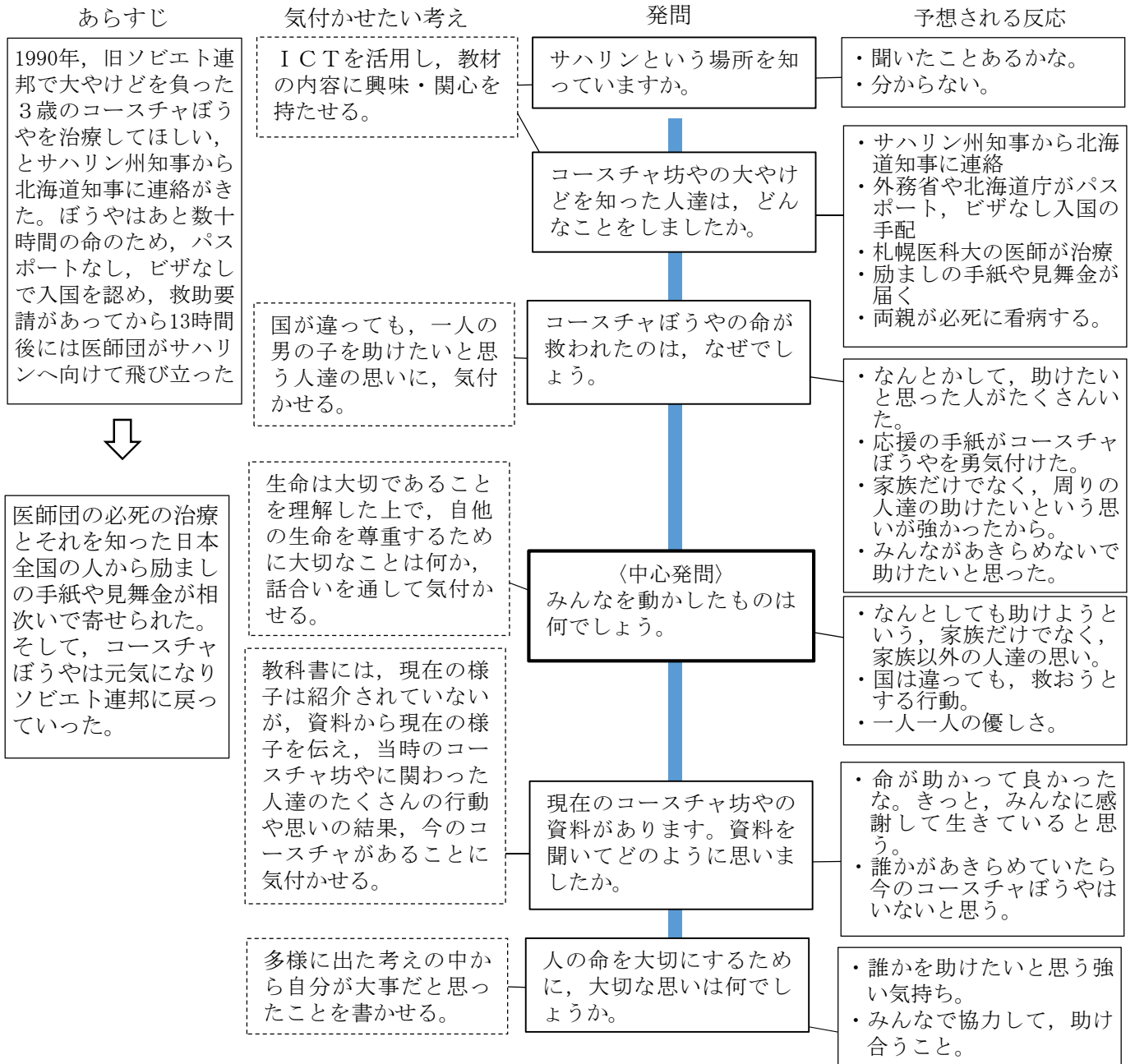
5 他の教育活動との関連



6 補充・深化・統合の視点【深化】

この教材は、多様な道徳的価値について考えることができる内容である。自他の生命の尊重のためには、「相互理解、寛容」「親切、思いやり」「感謝」「善悪の判断、自律、自由と責任」「希望と勇気、努力と強い意志」などの道徳的価値が関連することが考えられる。様々な困難な状況の中で、生命を尊重するためには、自分の生命を尊重するだけでなく、他の人の生命を尊重する気持ちが育っていなければならない。よって、本時は、自他の生命の尊重について、深く考えさせたい。

7 教材分析・発問構成



8 準備物

教師：教科書、場面絵、テレビ、パソコン

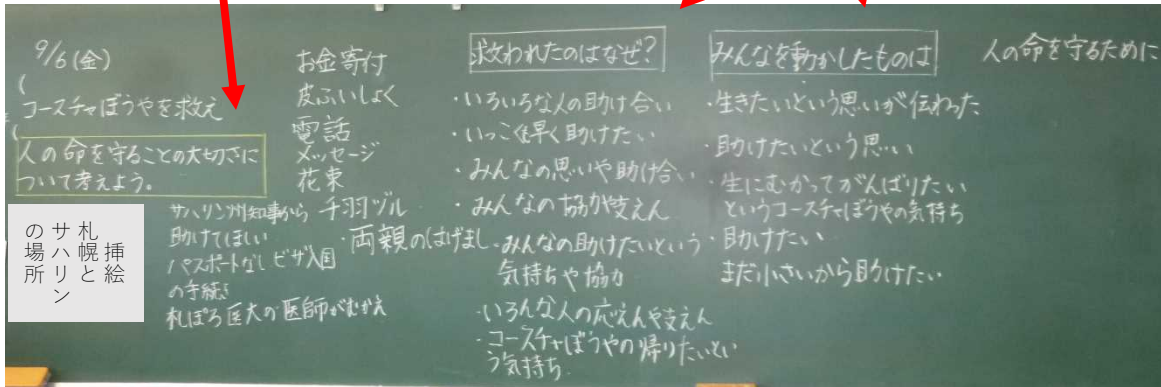
児童：教科書、ノート

9 実践の記録 (○成果, ●課題)

【板書】

児童に問題意識を持って考えさせるために、考えることを提示した。

児童の多様な考えを黒板に書き、多面的・多角的に考えさせるために活用した。



(1) 導入

問題意識を持たせた

実話を基にした教材である。1988年という、児童が生まれるだいぶ前の出来事なので、社会情勢も今とは違う。そのことも踏まえて、地図を活用し、どこか遠い国の出来事ではなく、現実にあった出来事として捉えさせたい。

- サハリン、モスクワ、札幌の位置関係を地図で確かめ、サハリンからは札幌が近いこと、しかし旧ソビエト連邦と日本の関係は必ずしも友好的ではなかったことを確かめることで、国境を越えてまで一人の少年を助けた人々の思いを考えさせるきっかけとなった。

(2) 展開

プレゼンテーション資料を活用し、教材の内容を自分の事として考えさせた

教科書は劇画タッチの挿絵だけなので、想像させにくいと考え、コースチャ坊やの話を取り上げた、インターネットのサイトから、実際の写真を活用し内容を把握するための助けとした。

- 実際の写真を見ることで、命に関わるやけどの大変さを実感させ、話の内容に興味を持たせることができた。
- 大やけどを負ったコースチャ坊やの写真と元気になったコースチャ坊やの写真を比べて見ながら、元気になるまでに、家族以外の周りの人々のどのような思いがあったからなのかを考える助けとなった。
- 教材の内容が難しく、内容の捉えに時間が掛かった。

多面的・多角的に考えさせるための発問の工夫をした

「コースチャ坊やの命が救われたのはなぜか」と問い、周りの人々やコースチャ坊や本人の思いや気持ちを話し合わせてから、「みんなを動かしたものは、何か」という中心発問につなげた。

- 人々の助けたいという思いや行動、コースチャ坊や自身の生きたいという思いから、「みんなを動かしたものは何か」という問いに対して、行動の奥にある思いを深く考えさせることができた。

道徳ノートの記述より

- ・コースチャ坊やが生きたい、頑張りたいという気持ちが、みんなを動かした。
- ・コースチャ坊やは、まだ3歳で、人生や夢が始まったばかりで、もっと成長して、未来に活躍してほしいとみんなが考えたと思う。
- ・コースチャ坊やを僕も助けたいという気持ちがこんなに強かった。
- ・幼い命を救いたいという両親の気持ちがみんなに伝わり、みんなを動かした。

(3) 終末

画像を活用した

○ 10年後のコースチャ坊やの画像やインタビュー記事を紹介したことで、人々の思いがコースチャ坊やを助け、今現在、元気に生きていることを実感させることができた。

自己を見つめた

○ 終末では、「人の命を守るには」として振り返り、今日の授業を通して、考えたこと、分かったこと、これからどうしたいかを道徳ノートに書かせることで、児童がこの時間にどのようなことを大事に思ったのか見取ることができた。

児童の記述

- ・人の命を守るには、一人一つしかない命だから、大切にしたいと思う。
- ・どんなに小さな命でもみんなで助け合えば、一人の命が救えて、みんなも救われた人もうれしくなる。
- ・一人でも多くの人を助けるために役に立つようにする。
- ・助けたいと思ったら、思うだけではなく、そのために自分が動きたいです。
- ・「がんばれ」と応援する気持ちを伝えて、みんなで協力することが大切だと思います。